

[03] Crossover

<https://doi.org/10.15017/19340>

出版情報 : Crossover. 3, pp.1-20, 1995-12. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン :
権利関係 :





CROSSOVER

No. 3
December, 1995



九州大学大学院
比較社会文化研究科

SCSのロゴの説明

SCS（エス・シー・エス）は、九州大学大学院比較社会文化研究科の英文名称 Graduate School of Social and Cultural Studies の略称です。ロゴはSCSを図案化したものです。考案者は「二羽の鴨に見える」と主張していますが、「一羽にしか見えない」と言う人もいます。しかし家鴨ではないという点では、私たちの意見は一致しています。裏庭の囲いのなかで餌をもらって外の世界を知らずにいる家鴨ではなく、越境する渡り鳥である鴨こそが、私たちのめざす新しい研究科にふさわしいと考えているからです。

目次

専門性／学際性？	1
ゼミ紹介 1.地域の構造と風土の文化	2
2.大地を探る	5
新任紹介 自己紹介	7
韓国の遺跡を掘る	8
日露トイレ比較考	9
「越すに越されぬクロス・オーバー、 越して見せようクロス・オーバー	10
海外レポート 1.点描；パリの人々	11
2.ロサンゼルス、雑感	13
学生レポート 中国語・ハングル語勉強会への誘い	17
理系研究室訪問	19

教官編集委員：森 俊洋、小池裕子、日下みどり
西野常夫、古谷嘉章、土場 学
嶋田洋一郎

学生編集委員：福田猛仁、柴山麻妃、星加健司
棚橋 円

専門性／学際性？

森 俊 洋
(比較文化講座)

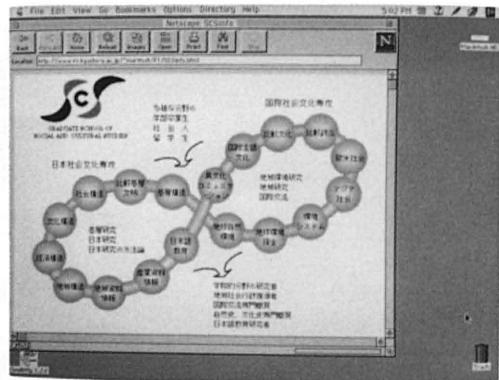
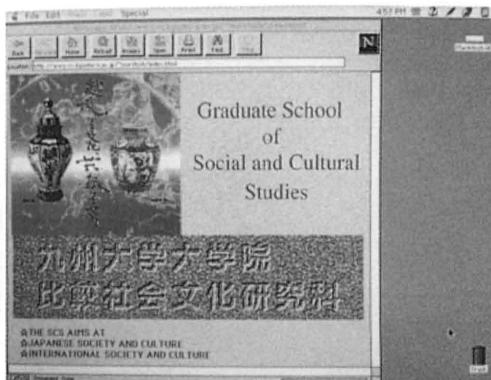
北の地からそろそろ雪の便りが聞かれ始めた。SCSが発足して一年半、一期生たちが修士論文の準備で胃に穴をあけかねない二度目の冬は、指導にあたる教師たちにとっては反省の季節の始まりのようである。新たに収穫されるべき果実の作柄予想の時期に至り、SCSの理念としての「学際性」をめぐる論議が盛んである。

「学際性」ということば自体には問題はない。O.E.D.によれば、使われ始めて既に半世紀以上の形容詞であるらしい。日本語としても「学際」は、緊急かつ複雑な問題に複数個の専門分野の学問が協力して対処する、さらには、異種の学問分野の協働による新たな学問分野の開拓、といった意味で今では相当にポピュラーなことばである。問題は、学際性なるものが実践に移されるべき教育理念として掲げられるとき、専門性という通常の大学院教育の理念との間で、教師の側でデイレンマの様相を呈することである。しかし、専門性と学際性はもちろん対立概念ではない。少し原理的なところから考えてみる必要がある。

学問の専門分化をめぐる問題を考えるとき、善かれ悪しかれ必ず引合に出されるのがアリストテレスの知の分類である。人間精神の基本的な二つの活動である。「観る」と「為す」に応じた「理論（観想）知」と「実践知」の原理的な区別がそれである。区別の規準は、知の関わる対象存在にとってその運動の原因がそれ自らのうちにあるか、それとも他のものすなわち人間のうちにあるかの違い、つまりは、対象存在が他の仕方であることができない（人間にはいかんともしがたい）か、それとも他の仕方でもあることができる（人間が行為としてまた製作として作り出さう）かの違いであるとされる。理論と実践、自然・世界と人間・社会、事実と価値といった対極的な構図の源泉である。

しかし、こういった原理的な対立区分が、一方でそれなりの意味をもちながらも、他方で両極の乖離ではなく緊張のうちに常に新たな知の論理の展開の可能性を紡ぎだすべき縦糸と横糸でもあることは、「観る」は人間にとっての最高最善の「為す」ことであるとするアリストテレス自身の思索を跡付けようとするとき、そしてまた諸専門個別科学の局部的事実認識と人間的な価値評価の分裂乖離の回避が急務である現代の諸問題に立ち向かうとき、どうしても認めざるをえないところである。「知る」ということが本当の意味で人間精神の活動としての「知る」ことであると言えるのは、知る人間自身がそこで個人的なまた社会的な生を営んでいる全体としての自然・世界を構成しているものとして知る場合、かつその場合に限って、であろうからである。

専門性を疎かにせずなおかつ学際的な視野をもつ能力をも培うという、一見無理難題に見える要求も、実は人間の「知る」ことの原点に立ち帰って考えていくことから、デイレンマの角をつかまえるか角の間をすりぬけるか、それぞれの分野において解決の糸口が見つかるのではなかろうか。



インターネット上のSCSホームページより

地域の構造と風土の文化

宮川 泰夫
(地域構造講座)

オックスフォード大学のボードリアン図書館と豊田市の図書館が交流協定を結んでいることを知る人は少ない。1978・79の両年オックスフォード大学のスクールオブジオグラフィ（地理学部）に滞在し、研究のかたわら授業とゼミを行う機会に恵まれた。

その機会に、学生や院生に最初に話した言葉は、地理学部の前にあるモーリスモーターの発生地と私の大学からみえたトヨタ自動車の高岡工場の「比較」という言葉であった。ガウン（大学）が深く根を降したタウンに誕生したモーリスモーターはローマ・キルン以来の物造りの伝統をもつカウリに展開した。これと同じように、町の刈谷に生まれたトヨタが中世の古窯のある猿投山麓の挙母に展開し、その両者に共通した構造と差異へと講義が及んでいくのが常であった。（拙論 Evolution of Industrial System and Industrial Community Sci. Rep. 30-1 1980）。

これは、両地域での実態調査に裏付けられ、**体**に**浸み込んだ真実・真理**の実感と洞察力以外、彼等に勝るものを私が持たなかったことの裏返しの事実にもすぎない。彼等は、実に良く、**自主的に、自律的**

に勉強した。

セミナーは、ヘッドプロフェッサー（学部長）のジャンゴットマンとマッキンダープロフェッサー（副学部長）のジョンハウスと私の三人で、「政治経済地域」を課題とし、内外の学生が具体的テーマを選択した。いつも4～5人の学生が競って次週の発表の機会をえようと争っていた。そして、結着がつかないとテーマの選択と解題は、「泰夫にまかせよう。」ということになった。泰夫にまかせれば、話題提供は短く、すぐに学生同志のデベートに移行できるからというのがその本当の理由である。

英語力に劣る私が、彼等にまがりなりにも先生としてアドバイスができたのは、日本の**風土と文化**が自然と培ってくれていた彼等とは異なった見方・考え方であり、彼等の知らない事実にあったことは言うまでもない。いくら、世界中の、古くからの図書を集めているとは言え、学生が、1週間の内に、実に良く**文献や資料を適確**に集め、付箋をはさみ、少なくとも5～7冊をいつも脇きに置き、それを巧みに使いこなすのには、舌をまいた。

我々が口をはさまないと、学生同志のデベートは、





九州大学院客員教授・ベングリオン大学
地域開発研究所 イフダ教授を囲んで



時には二人で一時間も続くこともまれではなかった。それ以上に感心したのは、二人以外の人間が実に詳しく、その討論を構造化し、その問題点を自らの参考文献を基に体系的にとらえていることであった。そして、御二人の先生が、その学生の問題点を巧みに整理し、セミナーの課題に沿って、それぞれテーマの選択を誘導し、次週に続く、セミナーの流れをつくりあげてゆくには、教えられることが多かった。

ある時、日本でも、「夕方の3時から夜の9時まで、食事をしながらゼミを続けたことも少なくない。」とオックスフォードの学生に話したら、それ以来、三人でのゼミの後で、学生同志の自主ゼミにつきあわされるようになった。そして、「合気道の稽古があるから」といって、その重圧から逃れることも少なくなかった。この自主ゼミで、またよせば良いのに、「日本だけでなく、私が講義したハイデルベルグをはじめドイツでは、疑問をもったら自分達で実態調査をし、資料・統計を集めて、頭だけではなく体で問題を解き、先生をつれて行って現地で議論してゆこうとする。」と言った。一ヶ月後に学生達がレポートを持ってきて、150頁を越えるレポートに具体的なコメントを付して戻すように求めてきたのには驚いた。

帰国して、その話しを日本の大学の学生に話しをしたら、英語の文献を自主的に整理をし、そのなかから自分達でゼミ旅行を計画し、調査をし、それをまとめて、海外との比較を試みていた。こうした学生の自主的研究の勢がなかったら、私も「工業配置論」(大明堂 1977)を基に「国際工業配置論上・下」(大明堂 1988・89)を著わし、恩師ジャンゴットマンの「メガロポリスを超えて」(鹿島出版 1993)を対訳し、解題しえなかったかもしれない。

九州大学大学院比較社会文化研究科のゼミでは、「国際」という切り口と、「計画」という視点、そして「風土・文化」という3つの基本的概念を大切にして、まず5年間を過してみたいと思った。一年半を経過してみて、4半世紀に及ぼうとするこれまでの体験があまり生かされたとは言い難い。内外の大学院での授業やゼミで、年上の社会人にもなれ、ウイスコンシン大学で初めて経験した社会人学生の催したパーティーの楽しさも覚え、社会人のなかには同業の大学教授もいたのに。そして、今でも、国内・外でまったく同じように試みているのに。何故か、「地域構造」の課題に個々のテーマを収斂させ、「風土と文化」を考察するように誘うまでには至っていない。まして、活発な自主ゼミを促すには、時を要する。それでも、ようやく、5人のゼミ生によって、

その萌芽がつくられつつあるのは、教育者としては救いである。“Do as a Romans Do”

昨年度客員教授として研究室に滞在したヨハネスブルグ大学の地理学部長ロジャーソンは、**インフォーマルエコノミーの大家**である。彼には、インフォーマルエコノミーの拠点、九州で彼も学んだオックスフォード大学と同じような二人でのオープンゼミを期待しながらも、その願いをかなえることなく帰国させてしまった。その時の反省もあって、本年度の客員教授である、ベングリオン大学のイフダには、イフダ自身の学生との触れ合いのなかで彼の判断に基づいて一度だけ**オープンセミナー**の機会をつくることを約束した。イフダも地域開発研究所長であり、また世界的な**フロンティア地域**、**砂漠地域の大家**である。そして日本の関連学会がその講演を事前に依頼したように地域の構造や風土・文化に関してその研究を通して優れた理論と実証だけでなく、**体に浸み込んだ学問的な感性**をもつ。聴講した学生だけでなく、イフダ自身オープンセミナーを通じて得るのが多かったと言ってくれたのは、心のやすまる思いがした。比較・社会・文化研究科であるだけに、もっとゼミナールを活用した**内・外の交流**が活発になり、膚で学生が比較のセンスを身につけられればと思う。

今春、イエテボリ大学での博士学位論文の審査を

行った。そこで、エクスターナルイグザミナーとして3時間、ドクターキャンデイデートとの**公開討論・審査**を無事終った時上述してきたゼミナールでの経験のもつ重みを改めてお互いを感じた。その後、オックスフォード大学で「日本とアジア変質する日本の工業」を講義した。そこで、ロジャーソンほどの学者に、インフォーマルエコノミーの日本の拠点の九州でセミナーの機会を与えなかったことを教官や院生に批判された。その批判は、ロジャーソンだけのためだけでなく、学生にその機会を与えなかったことが教官、院生相互の研究にとっての新たな刺激を生む機会を私が奪ったことに対するものであった。真摯に反省し、これからは、原点に戻って、できるだけ客員教授とともにゼミを行ってみたい。

今年のゼミのもう一つの新しい試みは、**学期末のゼミ旅行**である。修士論文のフィールドである北九州と釜山、長崎と忠北の比較のいずれかを、またはその双方を旅し、院生の説明をうけた後にその地域の風土文化産業の実態調査をしてみたい。前任校では、20年近く、毎年学生と調査実習に出向き、地域の構造を洞察する力をともに養ってきた。そしてその調査結果を基に色々と実地に議論をたたかわした。何故か、私にはその議論は地に足のついた最も重みのあるものを感じられた。



イフダ教授のセミナー

大地を探る

酒井 治 孝

(地球自然環境講座)

「ゼミの紹介」の原稿を書いて下さい、と頼まれ、ハタと考え込んでしまった。何故なら、私とその周りのいわゆる“理科系”の世界では、〇〇ゼミ、例えば本誌2号掲載の「太田ゼミ」というような言い方はしないからだ。では何と言っているかという、例えば構造研(研究室)とか〇〇ラボとか酒井研とか呼んでいる。ゼミと言う時には、論文やテキストの輪読会のみを指すことが普通である。理科系では野外調査、観測、分析、実験によって自分のオリジナルなデータを蓄積することなしには、研究が始まらない。大学院では人の論文を読むこと、討論することも勿論重要であるが、まずは観測方法や実験・解析方法を習得しないことには、研究を始めることができない。そんなところに「〇〇ゼミ」とは言わない理由があるように思われる。そこで「ゼミ紹介」とは「研究室紹介」のことと私なりに解釈して、私とその周りの地学系大学院生達の最近の活動状況をご紹介します。

* * *

私はヒマラヤと日本列島という対極にある2つの造山帯のでき方を探究し、両者を比較し、それを基に地球とその環境の変遷史を理解することにつとめてきた。私が現在研究中の主な対象は：1.ヒマラヤ山脈、2.第三紀火砕流、3.活断層、4.日本海の拡大、5.炭田の起源、6.四万十付加体である。もちろん研究対象の全てを一人でカバーすることはできない。そこで私が専門とする堆積環境と地質構造という観点から、私がアプローチできる範囲で研究を続け、他の分野の研究結果と併せ総合的に考察する作業を行ってきた。それにしても「ヒマラヤ山脈と日本海がどこでどう繋がっているの?」と言われる方がいらっしゃるかもしれない。ところが実は、地球という1つのシステムのなかで起こる地球科学的現象は、現象の1つ1つが思いがけずどこかで繋がっているものなのである。例えばヒマラヤという巨大な障壁が在るから、日本の夏に梅雨があり、冬にシベリアの寒気団が襲来すると言った具合に。従っ

てどの研究対象も相互に深い関係があるのである。

私の研究の基本は、徹底した野外調査と考えること、そして適切な室内実験である。“考えること”なんて研究には当たり前のことと思われるかもしれない。しかし厳しい自然環境の中で、時に泥にまみれ、汗にまみれながら調査をしつつ“考える”ということは意外に難しい。夜、その日のデータを整理し、一体どうなっているんだろう?何故だろう?と考えることは、日中の調査で疲れ切った体では容易なことではない。しかしそれを怠ると、ただ闇雲にデータを集めることになってしまう。調査中のふとした思いつきや疑問が、研究を次のステップに進めるための出発点である。しかしそれらを長年暖め、育て上げ、醸成するには、考えることが必要である。そこで私の学生指導の第1の目標は次のように設定している。“自分で問題点を見つけだし、調査・実験戦略を練り、考えながら調査・実験を行い、その結果を報告することができる Geologist (地球についての論理を見いだし、組み立てる人) を育てること”。

* * *

本研究科がスタートした平成6年度には岩石圏環境学の1つとして、「堆積環境論」と「造山帯のテクトニクス」と銘打った講義を行った。前者は夏の暑い盛りに、後者は冬の寒さ厳しい時に集中講義の形で行った。聴講した学生諸君の半分以上が地球科学分野以外の学生であったために、あまり突っ込んだ話はできず、かといって用語にすら馴染みのない学生にとって平易な講義でもなく、私にとっても学生にとっても不満の残る講義であった。「こりゃー、何とかせにゃならぬ!」と思案の末、平成7年度前期の講義は内容と方法を大幅に変更した。即ち、4泊5日の地質巡検旅行を中心に、その準備と報告というスタイルにした。巡検地域は中・南九州とし、9月26日から30日に実施した。夏休み前から5回の準備会を開き、巡検対象の火砕流堆積物や日本列島の骨格を作っている地層や岩石について、学生が文献

調査をやり、その結果を報告した。出発前には60ページからなる資料集をつくり、各自それを手にしてフィールドに出かけた。



ヒマラヤ山脈を南北に切る活断層(矢印)。垂直変位位置は25~40mに達する。西ネパール、ジウムラ東方、標高約4000m地点にて撮影。

巡検の最初の目玉は、阿蘇4火砕流堆積物であった。これは約8万年前に噴出した大規模火砕流であり、その末端は福岡市内や山口県にまで到達している。噴出源から遠く離れるにつれ、火砕流の温度は低下し、運搬エネルギーは減少するため、噴出源に近い所と遠い所では、「これが同一の火砕流堆積物なのか？」と信じられないほど、その顔つきは変貌する。福岡ではさらさらの火山灰が、豊後竹田ではしっかりした岩盤を成している。その変化を福岡―八女―菊池―阿蘇―竹田と巡りながら観察した。竹田では思いがけず、道路拡幅のため開削されたばかりの、高さ20~10m、延長100m以上の新鮮な露頭に出喰し、日の暮れるのも忘れて観察・採集に没頭した。

翌日は球磨川沿いに、日本列島の骨格をなす4~5億年前の古い岩石や化石を見て周り、最後に九州から関東山地まで続いている大断層、仏像構造線を見て人吉に到着した。こんな調子で、3日目は鹿児島、4日目は宮崎に宿泊して巡検を続けた。宿舎では、夕食が終わりくつろいでいると、今日見たことについての私の質問と説明が始まり、翌日の巡検コースの確認が終わって床につくのは、連日12時頃であった。この巡検、当初は教官3名が参加する予定であったが、日程の調整がつかず、5日間私1人で1200kmを運転し、指導する羽目になった。大変な旅行であったが晴天に恵まれ、学生諸君も座学でなく実物に触れながら説明を聞くことができ、教室で居眠りしながら聴講するよりも学習効果があったのではないだろうか？

さて私が直接指導しているY君の修論の研究対象は、福岡県内の活断層である。1つは遠賀川沿いに福智山の西麓を南北に走る福智山断層であり、もう1つは久留米から朝倉街道に沿って東西に走る水縄断層である。各々の活動の履歴や周辺の岩石の破壊状況を調べ、最近の活動の時期や性格を明らかにしようというものである。土曜・日曜を利用して、両断層の調査の指導に出かけたが、まだ基本的な作業のやり方や岩石の判別法を習熟しておらず、同行した先輩から手とり足とり教えてもらっていた。現在Y君は、秋と冬の本格的調査に備えて、空中写真を判読しながら地形分類図を作成しているところである。兵庫県南部地震が契機となり、各地方自治体で活断層の調査を始めようという気運が高まっている。「Y君の研究結果がそれらの基礎資料となれば良いが」と期待しているところである。

地学系教官・学生の間では不定期にゼミを開き、学会講演のリハーサルや学会・調査活動の報告を行っている。10月はじめには修士2年のS君が研究成果を学会発表したが、出発ぎりぎりまで1年生が発表の準備を手伝っていた。来年からは定期的に構造地質学の英文テキストの輪読会を始めようと、テキストを海外発注したところである。

最後に出版のお知らせ：12月に近代文芸社から「ヒマラヤの渚」という本を自費出版します。今春、小田原にオープンした神奈川県立生命の星・地球博物館に展示してある80トンの岩石を、ヒマラヤ山中で採取し日本まで運ぶという荒唐無稽なプロジェクトの奮闘記です。硬い岩の話ではなく、柔らかい紀行文です。生協書籍部にも置いていただく予定ですので、ご購入のほどよろしくお祈いします。



大正3年(1914年)の噴火で火山灰に埋没した鳥居と地質巡検中の大学院生。桜島町黒神にて。

自己紹介

桑原 義博
(地球自然環境講座)



この原稿を書いているのは、比較社会文化研究科へ就任してまだ一週間足らずで、自分としてはまだ学生気分がとれてないようですが、緊張感はありません。私は、4年と半年前、熊本大学から九州大学大学院理学研究科地質学専攻博士後期課程に入学すべく福岡にやってきました。当時、福岡に来て驚いたことは、飛行機が自分の頭の上を飛んでいることと、ジャイアンツ戦のラジオ中継があまりにも少ないこと(私は根っからのジャイアンツファンです。熊本では、テレビもラジオもジャイアンツ戦しかありません。)でした。

私の専攻は鉱物学で、特に、鉱物・岩石-水相互作用に興味があり、博士後期課程では、“金雲母の酸性溶液下での溶解過程に関する実験的研究”という主題で、青木義和教授をはじめ地球惑星物質科学講座の諸先生のもと研究を行っていました。雲母鉱物は、2価あるいは3価の陽イオンと酸素と水酸化物イオンからなる八面体シートを挟むように、シリコンと酸素からなる2枚の四面体シートが重なり2次元的に広がった層(これを2:1層と呼ぶ)と層を、カリウム等の陽イオンが中に入って結びつけたような層状の珪酸塩鉱物であります。主に、八面体シートに入る陽イオンの種類によって名前が異なり、アルミニウムが入れば白雲母(muscovite)、マグネシ

ウムが入れば金雲母(phlogopite)、鉄が入れば鉄雲母(annite)、マグネシウムと鉄が入れば黒雲母(biotite)と呼ばれるようになります。雲母鉱物は、酸性の水等に対して、その独特な構造により、四面体シート部より層間部や八面体シート部がより速く溶ける、いわゆる非調和的な溶解を示します。この非調和溶解により、雲母鉱物はカリウム等が少ないパーミキュライトやスメクタイト等に変化します。また、雲母鉱物は、ある条件では層間陽イオンであるカリウムが一層毎に抜けて雲母-パーミキュライト混合層鉱物等に変化したり、違う条件では、カリウムがまとめて抜けてパーミキュライト等に変化したり、さらに、いったん抜けたカリウムを再び吸収したりする等、おもしろい挙動を示します。現在、このような変化のメカニズムについては、まだ仮説の域を脱せず、更なる研究が進められています。

はじめに、鉱物・岩石-水相互作用に興味があると書きましたが、他の研究でも、例えば、続成作用や溶液中での結晶成長等にも関心がありますが、最近では、純粹に、鉱物標本にも興味が出てきました。去年でしたか、九州大学理学部地球惑星物質科学講座の上原先生(鉱物マニアらしい)と後輩の平澤君と3人で、東京であった学会の帰りに、東京ミネラルフェアという催しに足を運びました。そこでは、数百円の小さな鉱物から数万数十万円もする立派な鉱物や隕石が売ってありました。私は、特に、きらきら輝いた沸石のサンプルがほしかったのですが、値段が高くて当時学生だった私にはとても買えませんでした。結局、お袋に頼まれていた貴電気石(4000円相当だったと思う)を手に入れるぐらいでしたが、いろいろな鉱物サンプルには強烈な印象が残りました。ところで、九州大学には、日本における20世紀初期の3大コレクションの一つと称される“高標本”があります。本当に見事な標本ですので、興味のある方は是非見に行ってください。

最後に、六本松に在籍されている皆様方、どうぞよろしくお願いいたします。

韓国の遺跡を掘る

高久 健二
(基層構造講座)



東亜大学校発掘調査チームとともに。後列の右端で汚いタオルを首にかけ、不精ひげをはやしているのが私。まだ韓国生活に慣れておらず、かぜをこじらせてかなりばてていることと思われる。(1992年6月韓国昌寧校洞3号墳墓道にて)

本年、10月より大学院比較社会文化研究科基層構造講座の助手として着任いたしました。かつて学んだこの六本松キャンパスに再び帰ってきたわけですが、内も外も一新されており、驚いております。専攻は考古学で、韓国・朝鮮を主なフィールドとしております。出身は茨城県で、大学進学からこの福岡に来たわけですが、さらに玄海灘を越えて韓国に今年9月まで留学しておりました。

私が留学していた東亜大学校は韓国第二の都市である釜山市にあり、福岡とはわずか200kmしか離れていません。東亜大学校は学生数2万人を有するマンモス校で、付属の博物館もあり、人文学部の考古美術史学科とともに、考古学の調査・研究を行っています。私の留学生活は大学院博士課程の授業に出て、その合間に付属博物館の仕事を手伝うというものでした。韓国では開発にともなう遺跡の発掘調査の多くを大学が担当しているため、博物館の日常業務は遺跡の発掘調査とその報告書作成、および出土遺物の保管と展示公開になります。このうち私の行っていた主な仕事は遺跡の発掘調査と出土遺物の実測から報告書の作成までですが、これは韓国の考古学を専攻する私にとって生の資料にあたる最もよい機会でした。開発は遺跡を選んではいくれないので、大学で調査する遺跡は性格や時代が様々で、私がいる間だけでも古くは三国時代の集落や古墳から新しいところでは李朝時代の墳墓や城郭まで、多種多様な遺跡の調査に携わることができました。

留学するやいなや参加した慶尚南道昌寧郡校洞にある5世紀代の古墳群の調査は初めて経験する韓国での調査ということもあって、最も記憶に残るものでした。直径20m、高さ5mの円形のマウンドの下に長さ7mもの長大な横口式の石室をもち、その中に在地産の土器や鉄器、外来の装身具や馬具など数百点にのぼる多量の副葬品を納めたこの古墳の調査は当時、洛東江という大河を通じて他地域と交易を行っていた有力集団がこの地域に存在したことを明らかにしたとともに、自分自身がそれまでもっていた韓国の古墳に対するイメージを根底から覆すものでした。また、片言の韓国語を駆使しながら過ごしたこの2ヶ月間の泊まり込みの調査は自分の研究はもちろんのこと、韓国語の習得という点でも、その後の留学生活における大きなステップとなった調査といえます。



長大な石室の蓋石を開けると無数の副葬品が1600年の眠りからさめる。そこには当時の社会を知る上で重要な情報が秘められている。異国での感動の一瞬である。(1992年5月韓国昌寧校洞3号墳奥壁付近)

このように三韓・三国時代の古墳調査の機会に恵まれたこともあって、留学中の主な研究テーマは韓半島西北部に位置した楽浪郡の古墳文化と三韓との関係、および韓国の国家形成期である三国時代の古墳文化の解明でした。特に自ら調査・整理する機会の多かった青銅器や鉄器といった金属器を資料として、社会の発展過程や地域間の交渉について研究しておりました。今後はこれらのテーマに加えて、日本や中国などを含めた古代東アジアの対外交渉についても研究してゆきたいと考えております。ご指導のほどよろしくお願い致します。

日露トイレ比較考

寺山 恭 輔
(欧米社会講座)



“ドストエフスキーのお墓の前で、
ペテルブルグ”

私の専攻するロシア（ソ連）について留学中の体験を踏まえ紹介したい。椎名誠氏のエッセイに「ロシアにおけるニタリノフの便座について」というものがあり、ルポタージュのためにロシアを訪れた

椎名氏ら取材班は、トイレにはどこにも便座がなく、ひとしきり話題となったことを取り上げている。一般の家庭ではともかく公共の場、例えば図書館（かの旧レーニン図書館も）でさえ、便座をとりつける金具がありながら、ほとんどの便座がもぎ取られているという事態には私もしばしば遭遇した。なぜか？椎名氏らは、こわれても修理・補充しないことに原因を求めているが、私には、ここにロシア・ソ連の近代化のやり方の一例を見ることができるよう気がした。個人的には、私はずっと和式トイレで用を足していたのだが、中学時代に親の転勤で移った家はトイレが洋式で、しかたなくスタイルの変更を余儀なくされ、慣れるのに少し時間がかかったことを覚えている。果たして日本にいつ、どのようないきさつ（健康面からよいとみなされたのかも知れない）で洋式トイレが導入されるようになったのかについては詳しく知らないが、確実にいえることは日本人の配慮の行き届いた導入のやり方であろう。トイレに入れば、洋式トイレの使い方が丁寧に図解入りで示されている。また、公共の場では和式、洋式の両方設置されているのが普通である。

翻ってロシアはどうか。もちろん、図解入りの説明をみたことなどない。日本と同様のスタイルで生活してきた人々が、使用方法を知らずに、洋式トイ

レを見たときどういう反応をするだろうか。彼らは便座に腰掛けることなく、便座に両足を置いて用を足した、というのが私の説である。そうして便座が汚れば、次に使う人は洋式トイレに慣れていてもまた便座を跨ぐことになる。そのうちに、100キロ以上もある人が便座を跨げば、壊れることにもなるだろう。便座をつけていても汚れていたり、壊れたりして何の役にも立たない、再度取り付けても同じことだから取り外してしまえということになった、というのが結論である。かくして、私も便座のない便器を跨ぎ、便器に落ちないように注意しながら用を足すために途中で足がつりそうになるという悲惨な目にもあった。洋式トイレの導入を決定した人々はヨーロッパでの亡命生活が長く、公共トイレは洋式であることを大衆への説明や配慮なく決定したのではなかろうか。これに対して、あくまで頑固に自らのスタイルを貫き通すロシア大衆の心意気、惑いは西洋文明への無意識の抵抗と、日本の西洋文明受容のうまさ、安易さまで感じてしまった（大げさな）。

汚名挽回のために言っておきたいが、トイレの汚

さと全く対照的なのが、バレエ、オペラ、コンサート、演劇、絵画等の芸術の美しさ、素晴らしさであり、全くの素人だった私も充分に堪能することができた。とても恐ろしくて、汚く、貧しく、毎日のよう



彼は洋式派？それとも和式派？
ペテルブルグ フィンランド駅前の
レーニン像

に腹をたてることの多い、しかし、とても美しく、粘り強く、優しく、知的で限りなく豊かな国、そのような魅力のある国である。

この国をテーマに20世紀を考えていきたい。

「越すに越されぬクロス・オーバー、 越して見せようクロス・オーバー」

野田 香織
(地域資料情報講座)

私が幸運にも母校に職を得たことを告げると、その友人もしくは共同研究者はおめでとうと言って来て次に必ずこう質問する。

「それで今後、あなたの専攻は何になるの？」

難しい質問だ。日本社会文化専攻、地域資料情報講座に所属しているといっても、ますます困惑されるだけだろう。生態学と人類学の中間のようなことをしたいのだと説明して納得してもらおう。すると次に「でもあなたは確かこれまで環境保全の研究をしていたでしょう。それとどう結びつくの？」と問われる。この質問に答えるのには、長い話になるけれども、まず私のこれまでの研究をご説明しなければならない。

卒業論文では、理学部無機化学講座樽谷教授のご退官前の最後の教え子として珪酸質沈殿中のゲルマニウム分析を行った。酸性雨による森林破壊などに関心があったので、卒業後も植物への微量元素の取り込みなど自然保護に関連する地球化学的な研究を続けたい、と無邪気な大志を抱いて関門海峡を渡った。最初のクロス・オーバーであった。

愛媛大学農学研究科環境保全学科環境化学研究室というところで、私が最初にやったことは、オットセイの生態情報を集めることだった。当研究室では鯨類における重金属蓄積の研究を長年にわたって展開してきており、私の入学年度から水産庁との共同で国際保護獣キタオットセイのプロジェクトを開始したところだった。「あの一、私、植物がやりたくてきたんですけどー」という小さな抗議の声も空しく、気づくと私はオットセイ係。その一ヶ月後にはコチコチに冷凍された丸ごとのオットセイ25頭が水産庁の調査船から届き、アマガエルしか解剖したことのなかった私は、妙に手慣れた先輩・後輩の助けを借りて、1週間がかりでそれらを解体したのである。翌春にも25頭解体した。その時には私もオットセイの切り身を見て、「おいしそう」と思えるまでに成長していた。

さらに試料を集めに北海道からアラスカの孤島まで駆けめぐった。その島、ベーリング海に浮かぶブリビロフ諸島のセント・ポール島には、世界のキタオットセイ全個体数の9割が繁殖のために集まってくる。9割といっても、往時の半数にまでその数が減少しており、毎夏日・米・露の国際調査団が原因解明のため島を訪れる。その調査団に同行させていただいたのである。すばらしい経験をさせていただいたと思う。それまで冷凍死体しか見たことのなかったオットセイの繁殖地をこの目を見ることができ、自然死個体からかなり充実した化学分析用の組織試料を採取することができた。また現地の生態調査にも参加し、野生のオットセイの体重測定や標識装着などもアメリカの研究者と一緒にいった。オットセイの赤ん坊は毎朝次々に生まれて、みるみる大きく育ってゆく。日本では高山種のシオガマ、シラネアオイが、海拔0mのツンドラで咲き乱れていた。

このとき得たアラスカと日本のオットセイの組織中重金属濃度の地域差を比較した研究が、私の主論文になった。重金属を指標として繁殖グループを互いに識別できるのではないかと、というのがねらいだった。またその後水族館の協力も得て、オットセイの毛を収集し、毛の重金属濃度から食性や生息域などの生態情報が得られないか検討した。このように野生生物試料中の微量成分から保護に役立つ情報を得ようという方法論が、地域資料情報講座と結びつ

いたわけである。かくして私はもう一度海峡を越え、分野を越えてしまった。今は生物学と人類学の勉強に苦労している毎日である。



ギロチンのようにみえる捕定板を使ってオットセイに標式をつける。

点描；パリの人々

根 井 豊
(比較文化講座)

その1。それぞれ2週間に1回、10分程の小休憩をはさんで3～4時間行われるパリ第四大学（ソルボンヌ）とパリ第十大学（ナンテール）のゼミに出席する日と、国立図書館に調べ物に出かける日以外はいつもそうしていたように、9月の末のその日も午後4時半に、下の娘2人を小学校に迎えに行った。帰りに、旧フランス植民地の中央アフリカの国々から来たと思われる黒人たちが焼きトウモロコシを売っているいつもの建物の入口を覗いてみると、その日はもう何もやっていない。しばらく周りを見回し、あきらめて帰ろうとしていると、建物の奥から白人の青年が出てきて、「何か食べたいのか」と聞く。「子供が焼きトウモロコシを食べたかっている」と答えると、建物の奥まで連れていってくれた。外からは見えないが、中は食堂になっている。青年が言うには、誰か知っているひとがいれば、そこでは7フラン（約140円）も出せば十分に食べられるという。低所得者や失業者向けの、市から援助が出ている食堂らしい。緑色の制服を着た掃除夫や失業中らしい人々が3、4人ずつ集まって食事をしている。部屋の隅にたむろしている黒人たちのなかにいつも焼きトウモロコシを売っている青年のやさしい顔を見つけて、「今日は売らないのか」と聞くと、「もう終わった」と言う。子供を説得し、白人の青年に礼を言って外にでると、彼も私たちの後から出て来た。一緒に歩き始めると、さかんに話しかけてくる。技術士の資格をとって学校を出たが、なかなか職が見つからないのだという。3日後の就職の面接にかすかな望みをつないでいる様子である。いつもこの時間にあそこで食事をしているからあなたもいらっしゃいと言ってくれる。アパートに帰る角で彼の親切さに改めて礼を言い、「Bonne chance!」と言って別れた。

その2。或る土曜日の夕方、近くのスーパーでその晩と日曜日の分の食料を袋いっぱい買い込んで、両手に下げて帰っていると、向こうから、黒っぽい

服を着た、おそらくアルジェリア辺りから来た年配の婦人が、野菜が少しだけはいっている袋を腕に下げて、こちらに近づいてくる。「野菜は買えたが、パンを買うお金がない。小銭を少し」と言う。自分の買い物の量の多さが何となく気恥ずかしく感じられて、袋を足元においてポケットを探ると、10フラン硬貨がひとつだけ残っている。それを差し出すと、「それは多すぎる」と言う。「今、硬貨はこの1枚しかないから、これをあげる」と言いながら渡して行こうとすると、「ちょっと待って」と私をとどめる。自分の財布から2フラン硬貨1枚と1フラン硬貨2枚を取り出して私に渡してくれた。思わず“Merci”と言って受け取りアパートに帰った。・・・「なんだ、パンを買うだけのお金は十分もっているじゃないか」と気づいたのは、寝る前に、その日の出来事を思い返しているときであった。彼女のしたたかさと律儀さを同時に感じながら。

その3。11月に入ると小さな店も徐々にクリスマスの飾りつけが始まり、12月にはパリのもっとも華やかなときとなる。シャンゼリゼ通りの葉をすっかり落とした並木に2キロ近くにわたってイルミネーションがともされ、その夜の眺めは壮観である。大きなデパートもショーウィンドーの飾りに妍を競っている。そんな12月中旬の金曜日、夕方まで図書館で調べ物をしたあと、普段とは別の帰り道をとって、ゆっくりとオペラ座通りから、ギャラリー・ラファイエットの前まで夜のパリの景色を楽しみながら歩いて、華やいだ気分にも多少は満たされながら帰りの地下鉄に乗り込んだ。

乗降口の近くの補助椅子を下げてすわると、斜め前の補助椅子に、疲れた様子の35歳くらいの白人の婦人が坐っている。両肘を膝につき、前かがみになりながら、顔はあげて、険しい目つきだがつろに前方を見ている。くたびれたズボンにくたびれたアノラックで化粧っ気ひとつなく、髪も乱れている。その日1日の、或いは1週間の疲労が隠しようもな

く現れている。それにアパートに帰っても楽しい団欒が待っているのでもないようだ。仕事が終わりに、週末を迎える解放感はただよっていない。ただじつと焦点の定まらない視線を前方に向けている。ドアが閉まると、彼女と私の間にある鉄柱に、男のひとが肩をもたせかけて立ったままアラビア語の新聞を読み始めた。発車してスピードが増してきたらすぐに、カーブにさしかかったのか、車両が大きく揺れて、男はバランスを崩して倒れそうになった。婦人の肩に手をつけて、どうにか転倒は免れた。男は何も言わず、何事もなかったかのように、もとのように鉄柱に肩をもたせかけて、新聞を読み始めた。婦人も一言も発しない。しかし、先程まではうつろだった眼差しに焦点が決まったかのように、男を睨みつけている。男は新聞から眼を離さない。私のわずかに華やいでいた気分もすっかり消えてしまった。この緊迫のなかで、車両が再び大きく揺れた。男は今度は婦人の膝に倒れ込んだ。男は表情も変えずゆっくりと起き上がった。まだ一言も発していない。そしてまた鉄柱にもたれかかって新聞を上げようとしている。婦人は怒りに燃えた眼で、前よりもきつく男を睨みつけている。それでも怒りの爆発を抑えている。しかし、たった今起こった出来事に対する怒りを抑えながら、かえって様々な怒りが甦っているようだ。フランス人でもないお前たちのために高い税金を払わなければならない。お前たちのために職も減っている。職に就いても安い給料に抑えられている・・・。車両のスピードが落ちてきた。婦人は男を睨みつけたまま立ち上がり、顔を見据えて、抑えた声で、「御免ぐらい言ったらどうだ」と言った。抑えた声であるだけにいっそう怒りの深さが現れていた。男は視線をそらして、黙っている。ドアが開いた。婦人は降りた。降りて、もう一度振り返って男を睨みつけてから、出口に向かって行った。男はそのまま立っていた。

その4。ピエールのこと。ピエールは到底68歳には見えない、マルティニック出身の黒人男性である。私たちのアパートの建物から5、6軒先の同じ通りにある建物の管理人をしている。彼は昼間はよくその建物の入口に立って道行く人々を眺めていた。いつもキッチンとネクタイを締め、三つ揃いの背広を着て、頭にはケピをかぶっている。ヴォルテールの名

を採った地下鉄の駅への行き帰りにいつも彼を見かけていた。私たちはいつしかお互いに、“Bon jour ! Ça va?” と挨拶を交わすようになった。そうした日がしばらく続いた後お互いに簡単な自己紹介をして、挨拶の言葉に相手の名前が加わるようになり、彼は私に“tu, toi”で話しかけるようになった。

春の小さなヴァカンスの或る日、妻と子供たちは朝から出かけていて、ひとりで近くのパン屋で昼食のサンドウィッチを買って戻っていると、いつものようにピエールが建物の入口に立っている。「寄っていけ」と言ってさそってくれる。誘われるままに、入口の横の管理人室に入ると、ウィスキーをすすめてくれる。昼間は飲まないと断ると、黙ってビールの瓶を開けて手渡してくれた。ピエールが自分のジンを準備している間に、狭い部屋を見回すと、壁に隙間もなく、いろんな雑誌から切り抜いたらしいヌード写真が貼ってある。その写真の真中に、壁を四角に区切って美しい島の写真と家族写真が飾ってある。「これは何処か」と聞くと、「マルティニックだ」と答えて、問わず語りに話し始めた。35年前に、家族をマルティニックに残してパリに出て来た。それ以来一度も帰っていない。帰りたいもない。マルティニックはいやだ、と言う。何かいやなことがあったらしい。パリに来て20年、銀行の守衛をしていて、その重役がこの建物の持ち主だった関係で、そこを辞めて以来、ここでずっと管理人をしていると言う。そんな話を聞きながら、ビールを飲み干して、その日はそのまま礼を言って、アパートに戻った。しばらく経った土曜日の昼頃、前を通りかかるとまた「寄っていけ」と言う。その日は中庭の奥にある小さな会社の事務所を借りてパーティをするから、お前も来ないかとさそってくれる。午後には予定の仕事を考えてパーティの参加は断ったが、彼について管理人室に入ると、部屋の隅に40歳位の黒人の婦人と、10歳位の男の子が坐っている。ピエールは男の子を指さしながら「おれの息子だ」と紹介した。・・・マルティニックのいやな出来事が何だったのか彼は話さなかった。私も聞けなかった。

ロサンゼルス、雑感

三 隅 一 百

(地域構造講座)

1992年の暴動、翌年の地震、そして高犯罪率と、とかくマイナス・イメージが強いロサンゼルス。会う人ごとに、送別といえば忠告の言葉ばかり。初めての長期海外生活である。ただでさえ不安な気持ちを否応なしに高ぶらせながら、かつて天使が舞い降りたその「危険な」町に降り立った。昨年10月のことである。

頭でっかちのタツノオトシゴのような奇異な形をもつロサンゼルス市。その広さは東京23区の約2倍、ロサンゼルス都市圏になると関東平野に匹敵する規模になる。人口はロサンゼルス市で360万、郡で900万、都市圏だと約2000万に及ぶ。その人びとの足は車だ。通勤時間ともなると、蜘蛛の巣のようにはりめぐらされたフリーウェイのあちこちで、片道3～5車線の道路が完全にマヒする。朝のニュースではどのテレビ局も、ヘリコプターから各路線の混雑状況を映し出すのが日課だ。行政は、かつて車に駆逐された鉄道網の再建を急いでいるが、東京の鉄道網に比べればまだヨチヨチ歩きの赤ん坊のような階段である。

自ずと低階層の人たちや老人の頼りはバスになる。200以上ある広域路線バスと、各市が独自に運行する有料・無料のシャトルバスを使えば、2ドル前後で

だいたいどこでも行ける。結構、便利だ。かく言う私も滞在中はマイカーを持たず、バス愛用者を通じた。時間的ロスは大いだが、路線ごとの町並みや乗客の人種・階層の変化をじっくり観察できるし、いろんな人と話もできる。その魅力は捨て難かった。きっちり統計をとったわけではないが、運転手の人種・エスニシティ構成はアフリカン・アメリカン(いわゆる黒人)、ヒスパニック(スペイン語を母国語とする人)、コケイジョン(いわゆる白人)、アジア系の順に多い。そのうち女性は2～3割といったところだろう。だいたい皆バイリンガルでスペイン語か中国語を話せる。車内の様々な表示は英語とスペイン語、パンフレット類は中国語(ときにはハングル語)にも対応している。

多国語サービスは電話会社や自動車局等の行政サービスでも充実している。電話会社の日本語電話相談サービスには何度かお世話になったが、相当混雑しているらしく、通じるまで1時間以上かかることもあった。ケーブルTVも多様である。私が知る限りでもスペイン語と中国語がそれぞれ2局、韓国語が1局、それに日本語を含めた20余りの言語に対応している局が一つ。日本語では毎朝1時間、日本の前夜のニュース番組を報道しているほか、毎週末の



ダウンタウンの中心のあるパーシング・スクエア。他の公園より比較的ホームレスが少ない。遠方の高層ビル群はバンカーヒルのビジネス街。

夜に3時間、日本のドラマやお笑い・クイズ番組を流している。月曜夜には、日本とロサンゼルスとの関係に焦点を当てて様々に特集を組んだ日系ニュース番組が報道される。大相撲ダイジェストも人気番組だ。日本人の多い地域では、レンタル・ビデオ屋が各種の日本のTV番組録画、邦画、字幕入りの洋画を豊富にとり揃えている（ボカシ入りのアダルト・ビデオがわんさとあるのには驚いた）。スーパー・マーケットの日本食品の充実ぶりは、その辺のコンビニに引けをとらない。その気になれば、日本文化を固持しながら英語を使わずに生活することも、ある程度可能だ。

さて、私がお世話になった California State University Los Angeles (CSULA) は、そのロサンゼルス市の東端、いわばタツノオトシゴの口先（後頭部!?) あたりに位置する。ダウンタウン LA までフリーウェイを使えば10分の距離だが、ちょっとした丘陵地帯にあり、我が六本松キャンパスよりはるかに環境はよい。なにせ建物の大半が1~2階建の平らな都市である。展望は抜群だ。社会学部のある建物の屋上から、夕刻、街が刻々と影に包まれてゆき、北側に壁のようにそびえるサンガブリエル山脈が真っ赤に染まってゆく様子を、飽きずに眺めた。振り返れば（正確には別の建物の屋上まで疾走する必要があるのだが）、夕日がサンタモニカの空を染めながらダウンタウンのシルエットを残して沈んでゆく。

景色もさることながら、キャンパスの雰囲気もおもしろい。図書館やカフェでボーッとしていると、ときに日本の大学にいるような錯覚に襲われる。そ

れもそのはず、アジア系学生が3割を超しているとのこと。お隣オレンジ郡の UC Irvine の友人にそれを自慢(?)したら、「ウチは5割だよ。」とさりげない。UC Immigrants の異名をもつ由縁、上には上がいる。アジア系に次ぐマジョリティはヒスパニック。この二大勢力構図は南カリフォルニアの各大学に共通した特徴になっている。もっとも、キャンパスを一步出ればアジア系はまだマイノリティ。そこは名実ともにヒスパニックの町である。

1990年時点でロサンゼルス郡のヒスパニック人口は38%と、すでに白人の41%に比肩している。アジア系は黒人と残り20%を等分する程度だが、その伸び率は急速だ。ここ数年、カリフォルニア州に流入する移民は毎年20万人を超している。その20%はメキシコ人、しかも若年層が圧倒的に多い。21世紀初頭にはヒスパニックが50%に達するという予測もうなづける。

それらの変化は地域の人種地図を塗りかえてゆく。例えば、CSULA の東にある人口6万のモンテレー・パーク市。近年急速に成長したアジア系コミュニティで、人口の6割がアジア系、その増加率はここ10年間で2倍に及ぶ。中国系が中心だが、韓国系や日系も少なくない。中流を絵にかいたような住宅地が一带に広がる。環境が悪化したダウンタウンのチャイナタウンやリトル東京から脱出してきた人たち、そして他所に店やオフィスを構える新移民たちだ。逆に、同市の白人人口はここ10年で50%減。同市以外にも、アジア系と白人の入れ替わりが進行している地域は少なくない。白人は郊外へ、さらに郡



ロサンゼルスの特徴ともいえるフリーウェイ網。写真はダウンタウンの西を横切る110号線での夕刻のラッシュ。

外、州外へと「撤退」を続けている。ロサンゼルス
の白人の減少は、比率の問題以上に実数の問題だ。
そしてこの玉突き的連鎖のもとをたどれば、ダウ
ンタウン LA におけるラティーノの大量流入と黒人
スラムの周辺化が見えてくる。

ダウンタウン LA にラティーノが大量に流入し
だしたのは、1980年代だといわれる。注意しなけれ
ばならないが、不法移民も含めて、彼らは黒人スラ
ムの中に新たなスラムを形成したわけではない。む
しろ逆に、インナーシティ再生の担い手になったと
いうべきだろう。象徴的なのが、ダウンタウンの中
央を南北に突き抜けるブロードウェイ。ここでは毎
年5月に、ラティーノがダウンタウンを奇跡的に復
興させたという、ちょっと変わった主旨の祭りが開
催される。かつて白人上流階層でにぎわったとい
うこの銀座通り、一時は黒人スラムと化し、空洞化の
運命をたどっていた。しかし賃貸料が下落したビル
群にラティーノが流入し、スワップミート街に一変
した。

ラテン音楽に乗って、「パセレ、パセレ」という呼
び込みがあちこちから飛び込んでくる。周囲が殺伐
としているだけに、夜まで人通りが絶えないブロー
ドウェイの賑わいは異様ですらある。多くの店はビ
ルの1階を露天商的に使っている。それぞれは零細
だが隙間がない。車社会を前提にして空間が人を遠
ざげる作りのビル街が多いロサンゼルスにあって、
ここは空間の連結機能を駆使した希有な「商店街」
となっている。その意味では「再生」というよりも、
ラティーノによるラティーノのための新しい町の出

現といった感じだ。活気を取り戻した通りに白人が
戻ってこないのは、その辺の理由かもしれない。

ブロードウェイで扱われている主な商品は、衣類、
くつ、貴金属、時計、雑貨、電化製品。商品の「国
籍」は実にさまざまだが、それさえ気にしなければ
(実際は品質がついてくるからそうもいかないが)、
頭から爪先まで一式揃えても100ドルでおつりがく
る。ある衣料店でその「国籍」について店員と話し
ているとき、思いがけないことを知った。「これはど
こかその辺で作ったものかもね。」縫製工場が近く
にあるのかと聞くと、ブロードウェイのことで、スワ
ップミートがひしめくビルの階上部分に縫製工場群
があると言う。調べてみると、経営者の多くは新し
い富裕移民の韓国人かベトナム人、労働者の多くは
不法移民のラティーノのとのこと。劣悪な労働環境
だけでなく、違法の低賃金や長時間労働など、不法
移民の立場の弱さにつけ込んだ搾取的経営が問題に
なりだしている。ブロードウェイのすぐ西側のジュ
エリー地区でも、宝石加工工場が同じような形で展
開している。

途上国で展開されている多国籍経営が、ここでは
労働力側の国際移動によって、先進都市のまっただ
中で行われているわけである。良くも悪くもそれ
が、熾烈な国際経済競争の中でロサンゼルス
の経済復興を支えてきた。「ブロードウェイの奇跡」の背後
には、冷徹なまでの経済法則と人種・エスニシティ
に沿った階層間隔差が見えかくれする。さらにその
周囲には、搾取の対象にすらならない黒人たちが一
日の糧を得るために懸命に生きている。



ロサンゼルス発祥の地、オルベラ街。屋台をおり混ぜたみやげ屋
やメキシカン・レストランが立ち並び、観光客で賑わう。通り向
いの教会はラティーノたちの精神的依りどころになっている。

白人中心のハイテク産業に並んで、不法移民が支えてきた繊維・縫製や貴金属は今やロサンゼルスを代表する産業に成長した。清掃業や福祉の介護労働などでも、彼らの存在は不可欠である。しかし近年、不法移民に対する風向きは必ずしも良くない。二度目にダウンタウンを訪れたとき、3万人を超す大規模なラティーノのデモに度胆を抜かれたことを思い出す。警察によって完全封鎖されたダウンタウンを練り歩く長蛇の列。駆けつけたラティーノたちが、メキシコ国旗のもとに次々と加わってゆく。実はこれがカリフォルニア州で成立した、不法移民の市民権を厳しく制限する主旨の住民投票「プロポジション187」に対する抗議デモだったことを、後で知った。とくに白人中間層の間では、不法移民に起因する貧困・犯罪問題のために血税が浪費されているという不満が根強い。依存と排斥の葛藤から引きだされた結論は、アメリカン・ドリーム of 「幻想」に対するひとつの終止符宣言とも受け止められるものだった。

「パイは限られている。」しかしロサンゼルス経済の斜陽の中でそのパイをかりうじて増やしてきたのも、移民マイノリティではなかったか。どうもすっきりしないまま、TVのデモ隊の傍らに自分の姿が映らないことに腹を立てている私。所詮、根底にあるのはこういう低級のミーイズムなのかもしれない。だとしたら、病巣は深い。

問題は不法移民だけではない。マイノリティ間対立を露呈した92年暴動やオクラホマ・シティの爆破事件はその噴出とも言えようが、全般にアメリカで

は人種間の排他主義的傾向が強まりつつある。何かにつけ、どこかぎくしゃくしたわだかまりが消えない。多様な新移民の大量流入は、白人対黒人の二極構造を複雑化しつつ、一方で人種・エスニシティにそった階層間格差を鮮明化している。異質なもののぶつかり合いが生み出す創造に支えられてきたアメリカ。そのアメリカが、許容水準を超えた量とスピードの異質化を経験し、苦悩している。否、異質性がその許容水準を突破する力を生み出せない、そうした構造的病理の問題かもしれない。

「彼はすべてを捨てて来た。われわれと同じだ。」突然だが、ある紙上での野茂評である。もちろんLAドジャースで活躍した野茂投手のことだ。(私の)予測に反して、野茂フィーバーはアツというまに全米に広がった。それには敵役としての人気もあるし、ストの影響で低迷する野球人気に対する火付け役としての「商品価値」が注目されたことも大きいだろう。しかし大方のアメリカ人は、先の野茂評と同じような心境で基本的に彼を受け入れたように思える。私にはそれが、古き良き時代のアメリカン・ドリームに対する郷愁と重なって見える。実際、右腕ひとつでやってきて、大リーガーたちを次々に三振に斬ってとる彼の雄姿に、アメリカン・ドリーム健在の証を求めた人は少なくあるまい。ただそれが次のような逆説の表れでないことを祈っている。「彼がアメリカン・ドリームのお手本だ。わかったか。わかったら、能力なき者は即刻去れ。」

「Lost Angeles」に再び天使が舞い降りる日を信じていたい。



ダウンタウンの西の一角は広大なコリアタウン。暴動以降も治安は良くない。写真は3番街で見つけた「派出所」。リトル東京にも設置が急がれている。

中国語・ハンゲル語勉強会への誘い・・・

棚 橋 円

SCSには、留学生が多い。一番多いのは韓国からで10人、ついで中国の5人。圧倒的にアジア系の留学生が多いのは近いからということもあるだろうが、さすがアジアの拠点、国際都市福岡といったところか。まあそれはいいとして、我がSCSでは、そうした研究生を含めた多くの留学生が、連日研究に打ち込んでいる。

それにしても彼らは日本語がとてもうまい。微妙な表現などは仕方がないかもしれないが、日常生活



中国語勉強会

はもちろん、ゼミにおいても日本語という外国語を駆使して日本人と対等に渡り合う。さらには日本語で夢をみることもあるというから全くもって恐れ入る。自分など中学時代から足掛け10年は英語をやっているというのに、英語の夢など未だかつて見たことがない。まあ自分の話はおいて、彼らも日本の大学院に来るくらいだから日本語の習得には当然必死に取り組んだらしい。彼らの苦労話を聞いていると、外国語を学ぶことの困難さがひしひしと伝わってくる。やはり自分の母国語以外の言語を自在に操ろうと思ったら、本来絶え間ない努力と忍耐力が要求されるわけであるから。

外国語習得のためのプロセスには、実銭という面が大きくクローズアップされてくる。昨年、研究生

としてこのSCSに入った韓国の申さんは、当初全く日本語ができなかったらしい。しかし実際にこの日本で生活し、勉強していく内に日本語を習得し、今年の4月には見事にSCSに入学した。これでも例証されるように、本当にそこの国の言葉を習得したいと思ったら、ある程度の文法の知識を身につけた後、ぼんとその国に乗り込んで実践の中から学ぶという方法が一番効果的であるようだ。しかしなかなかそうはいかないのが現実で、多くの場合が大学

2年生ぐらまでの時期までに、必修として強制的に勉強させられる外国語に嫌気がさし、その言語を本当に自分のものとして確立したいという欲求にたどり着く前にあきらめてしまっている。(SCSの大学院試験には第2外国語はないし。)おかたい文法書ばかり読んでいて、知識だけはネイティブ以上のものをもっているにも関わらず、実際のコミュニケーションとなるとついついしり込みしてしまうのは、これまでの外国語教育でしばしば指摘されてきた問題でもある。まあ、しかし最近では高校でも英語のオーラルコミュニケーションは必修となり、AET

の先生も交えたチームティーチング等、実際のコミュニケーションを重要視した授業も行われているらしいが。

前置きが長くなった。まあそういった現状も踏まえ、せっかく留学生の人もたくさんいることだし、彼らとの交流も含めて楽しくかつ効率的に外国語を学ぼうではないかというコンセプトのもとに、ハンゲル語勉強会と中国語勉強会が始まったわけである。

発起人は修士2年生の有吉さんと池田さん。話が具体化したのは今年の9月頃。最も去年はハンゲル語のみで、この2人を中心に毎週1回1時間、5人程度の参加者と1人の先生でハンゲル語に取り組んでいたそう。そして今年には中国からの留学生も増えたので、中国語勉強会が新しく開講(?)された。今年のメ

ンバーはハングル語が先生6名で、生徒が7名。中国語の方が先生が5名、生徒が6名。最近は、さすがに2年生も修論に追われて参加者も少なくなったが、



ハングル語

細々ながらも和気あいあいと続いている。

自分自身は今年からこの2つの勉強会に参加したわけだが、特に良かったと感じる点が2つある。一つは、なんといっても先生がネイティブであること。もちろん彼らはそれ専門の教師ではないけれども、外国語を勉強する過程でネイティブの発音をナマで聞ける機会はそうそうあるものではない。(おまけに授業料はなし。)さらに独学ではいくら悩んでもイメージがつかめない発音も、ネイティブの一言でさっと解決してしまうことも多々ある。("百読も一聴にしかず"といったところか!?)もう一つのメリットは交流である。この勉強会を通じて、言語の習慣は

さることながら、留学生とその言語を通して韓国、中国の文化に触れることができた、あるいはできるということはそれだけでも大きな収穫であるように思える。

先生になった留学生の方にも、今までの授業で感じたこと等少し話を伺ったのだが、やはり小さい頃から自然に身につけた母国語を改めて体系的文化的整理し、説明しながら初心者に教えるということは相当難しいらしい。しかし、自分の国の言語、あるいは自分の国の文化について少しでも興味を持って勉強しようとしてくれることはとてもうれしいという事だ。(そういつてくれると生徒もとてもう

れしい。)また、日本人と韓国人、中国人の間に過去に起こった歴史的な確執も、こうした小さいけれども人間的な交流を通して解消していけるのではないかと語ってくれた。

T:じゃ最後にこの勉強会に対して要望とかはあるかなあ。

K:教えてもらっている立場だから特にないけど、うーん強いていえばもっとたくさんの人に来て欲しいよね。そんなに気負わず気軽に参加してくれたらいいんだけど。

T:そうそう、初心者大歓迎。実際Kさんも全くの初心者だったわけだし。

K:イベントも楽しみだしね。

T:ホントはそっちの方が楽しみなんじゃないかあ?

K:そ、そんなことないさー。私は純粹にだね、中国語とハングル語を学びたいと・・・(動揺している)

というわけでだいま参加者大募集中。受講料無料、時間曜日は応相談。長期休暇前にはイベントもあります(小旅行やお食事会、山登りなど)。先生、学生を問わず、少しでも興味がわいた方、ちょっとした教養を身につけたい方、イベントだけでも行きたい方、近いうちに中国や韓国に旅行しようと思っっている方は、是非是非参加されたし。新しい世界が開けるかもしれませんよ。

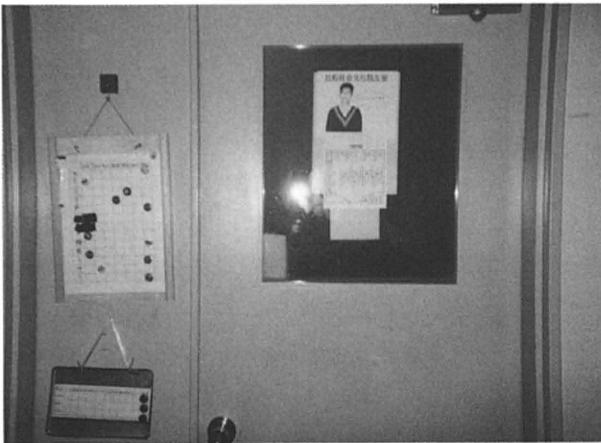


ハングル語

理系研究室訪問

星 加 健 司

SCSが設立されてから、約2年が過ぎました。学際をうたったSCSですが、院棟にいる人たちは理系の人たちや箱崎に行っている人たちとは交流がないので、理系の研究室を訪問し、その研究の様子や、大学院について思うことを尋ねてきました。



本館4号館3階のナマズのいる暗い廊下を過ぎると、ドアに可愛い「比研」の貼紙があり、中に入ると院棟よりも暗く、ごちゃごちゃとしていましたが、それぞれに机が割り当てられており、其処に顕微鏡や山のように積み重ねられた文献や資料があり、如何にも研究室という雰囲気が漂っていました。

今回は、昆虫の研究や活断層の研究をしている4人の方に協力して頂きました。

(以下、編集委員：編、協力して頂いた理系の方々：理)

編A：院棟をどの程度利用されていますか。

理A：コピーの時くらいです。

編A：クロスオーバーという雑誌を知っていますか。

理A：なんか見たことがあります。

編A：文系と理系は交流が無いですね。

理A：文系の人たちは交流があるんですか。

編A：はい。でも理系の人とも友達になりたいと思っています。顔も知らないから挨拶もしないなんてありまらよね。交流を増やすためにはどうしたらいいと思いますか。

理：(無言)

編B：理系の研究室の場所を知らない人もいますよ。

理：(無言)

(感想：返事が無い。どうも交流を持つのは面倒臭そうである。話題を変えて研究について尋ねてみた。)

編A：学校にはどの位居ますか。

理A：あさ9時から10時位には来て、夜の11時迄居ます。(編：ええー)でも、ずっと研究している訳でもないし、喋ったりしてマイペースでやっています。

編A：夜中とかも居るんですか。

理A：居るときもあります。院棟は10時迄しか開いてないんでしょう。

編A：はい。

理B：こっちは一応教官が居るということで、夜も入れるようになっているんですよ。

編A：何か不便なことはありますか。

理B：別に。

編A：何の研究をしてらっしゃるんですか。



理B：昆虫のハエの系統分類です。日本のあちこちでハエを集めて飼育したり、「夏休みの宿題」みたいに標本にしたりしています。

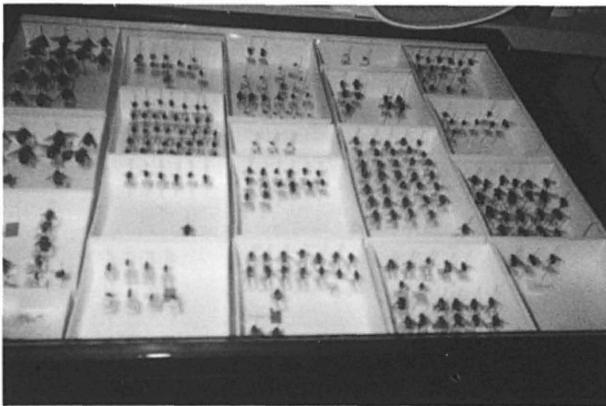
編C：フィールドワークをするときには研究費は出ますか。

理A：出ません。半分趣味でやってるようなものだから、これで金が出ると……。

編B：これハエの標本だ。写真撮っちゃおうっと。

(某彼女はいたく感動していました)

理C：僕は活断層の研究をしています。(「これマイク入ってる？」少し緊張気味) ここでやる研究は、まず調査地域の空中写真で、平野・山地・扇状地等の分類をして、実際の調査地域、僕だったら北九州の福地山へ行き、フィールドワークをしたりしています。



編D：今年の夏休みも行きましたか。

理C：いえ、今年は暑かったので部屋に籠って勉強していました。秋はいい季節ですので、これからどんどん外に出て勉強したいと思います。

編B：すごいですね、こっちのほうが全然勉強しているという気がしますね。

編D：ところで、どうして比研に来たのですか。僕は経済学部に来たのですが、比研でも経済学部の授業を受けられると聞いてこっちに来ました。

理C：話すときから。

編D：比研って、外に宣伝している筈ですが、何かで見たことがありますか。

理A：いいえ。僕は先生と知り合いだったので。

編A：比研に来た感じはどうか。

理A：毎日が充実しています。

編A：研究は進んでいますか。

理A：厳しいですね。

編D：話は変わりますが、学際性についてどう思いますか。

理B：解らないですね。

編A：ここでやっていることと、理学部でやっていることと、多少の違いはあるんですか。

理B：僕がやっていることは、どちらかというと農学部に近いから。

編D：こういうことは農学部でも比研でもできるん

じゃないですか。

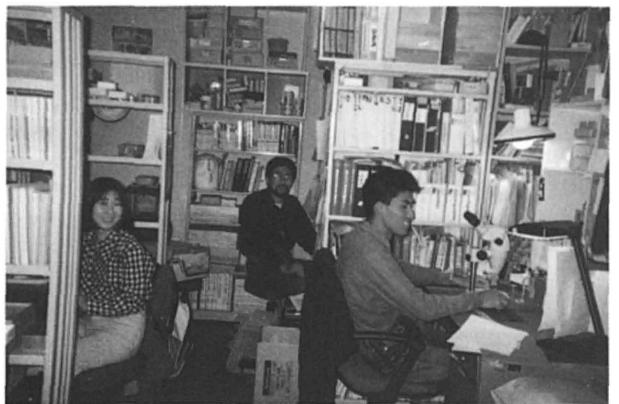
理B：どっちでもできると思いますよ。でも農学部より比研の方が、自由にテーマを決めやすいということはあると思います。

編B：私はロシアの言語政策について研究しているんですけど、やはり法学部にいるよりも、比研の方がやりやすいと思います。

理C：僕が聞いた話では、例えば古墳の研究なんかの時、資料では国史学、地層なんかは地学でしょう、それから土壌を調べるときは化学、という風に、色々な分野が関係しているということで、いずれは僕達にも様々な分野にわたる研究をしてほしいということらしいですよ。比研では文系・理系の人の交流が行ないやすいというメリットはありますが、自分の研究のレベルを上げてからでないと、とても他の領域には入れないと思うので、学際性も修士レベルでは難しいと思います。

編A：2年間で修士論文を書くことを考えれば、確かにそうかもしれませんね。テーマを自由に決めやすいという点はいいと思うんですけども。

理B：でも、学際性については、皆本当に解っているかといえば、先生方もあまりそれを求めてないような気がしますし、むしろ学生の方にそれを探させているような感じがします。



編B：学際性については、議論の別れる問題ではあるけれども、学生同志でも意見の交換を通して考えていかなければならないことだと思われれます。

同じ研究科なのに今まで研究室の場所も知らないし、交流も少なかったのが、色々な分野の人たちと交流ができるという比研のメリットを活かすために、理系の人たちも面倒だとは思いますが、何かイベントがあればどんどん参加してほしいと思います。



GRADUATE SCHOOL OF
SOCIAL AND CULTURAL STUDIES

発 行 者 九州大学大学院
比較社会文化研究科

発行年月日 1995年12月15日

〒810 福岡市中央区六本松4-2-1

九州大学大学院比較社会文化研究科

T E L : 092(771)4161 内線216

F A X : 092(731)8745